

〔連載〕  
京都の民主運動史  
史跡散歩 ⑭

常寂光寺「女ひとり」の碑  
(右京区嵯峨野)

紅葉に染まった嵯峨野の秋。小倉山の山腹に立つ常寂光寺も賑わうが比較的静かだ。山門をくぐり、仁王門の手前を右にすすむと「女の碑」にたどり着く。「女ひとり 生き ここに 平和を 希う」

「反戦」で連帯、  
独身女性の墓

揮毫は市川房枝。1979年12月8日に完成した。「趣意書」には、「大戦で200万人の若者が戦場で生命を失い、その陰にあつて50万余の女性が独身のまま生きることになり、これらの女性たちは懸命に生きてきた」「今、ここに、ひとり生きた女の『あかし』を記し、戦争を二度と繰り返してはならない戒めとして後世に伝えたいと切に希います」と彫られている。

独身婦人連盟の会員たちが自らの行く末についてお互いに支え合い、死後も同じお墓に眠ろうと嵯峨野に碑を建て永遠の住処とすることを計画した。

戦争独身女性の独創による反戦運動に共鳴した長尾憲彰住職はすすんで建立のための土地を提供、1990年には碑の傍に「志縁廟」も完成している。2001年10月15日、ここで長尾住職の読経を聞きながら約100人の女性が手を合わせ「テロと戦争の悪循環の中止を」祈っていた。この日をもって「女の碑の会」は解散を決めた。会員の高齢化で運営が無理となったため。

環境・景観保全の住民運動の先頭に立っていた憲彰師は2012年に亡くなり、今は憲佑住職が後を引き継いでいる。(参考) 杉岡碩夫『現代仏教の課題 常寂光寺の戦後史を通して』ウインかもがわなど)

(湯浅)

9月例会の報告 検証 京都の勤評闘争—田中地区同盟休校を中心に	生駒 佳也 2	〔資料〕 京都における憲法運動 略年表(4) 15 12月例会の案内 16 会員消息／情報スクラップ／ 編集後記 16
〔随想〕 中国で混声合唱組曲「悪魔の飽食」を歌う	馬原 郁 7	
〔悼〕 山内 久さん	井上 吉郎 7	
「岩崎革也日記」を読む	芦田 丈司 8	
発掘 戦後70年1946年、京都で刊行された雑誌「時論」と嬉野満洲雄	湯浅 俊彦 10	
「京大反戦詩集」のことども(2)	小畑 哲雄 12	
<この1枚> 1967年7月 新宮津火力発電所建設反対闘争 漁民ら2500人がデモ	14	
<BOOK> 杉本弘幸『近代日本の都市政策とマイノリティ 歴史都市の社会史』	15	

# 検証 京都の勤評闘争

## 田中地区同盟休校を中心に

生駒 佳也さん（徳島市立高校教諭）の報告

9月例会は9月26日午後、東山いきいき市民活動センターで開かれ生駒佳也さん（徳島市立高校教諭）から「検証 京都の勤評闘争―田中地区同盟休校を中心に」をテーマに語っていただきました。当時の闘いに参加した人も含め十数人が参加、熱心な質疑や体験も話し合われました。以下報告の要旨。

### 1、3日間の同盟休校をさぐる

今回の報告は、1958年7月、京都市左京区田中地区の小中学生約400人が、勤評闘争に参加し、3日間の同盟休校を実施し、京都府・市と交渉をもつ運動を展開するに至った経緯とその要因をさぐるものです。

勤評闘争において、京都の分析を試みた先行研究は少なく、従来は、安保闘争の前哨戦として、さらには、部落解放運動の到達点として、戦前の水平運動と直線的に結んでその先進性を説明する論が多く見られました。しかし、ここでは単に社会運動論を基盤とするのではなく、田中地区を含む養正学区を見ることで、その政治空間に持ち込まれた諸矛盾が、教育を媒介としながら独自の社会運動に発展していく姿を明らかにし、1950年代の都市空間における地域社会の事例を示すことを目的としました。

### 2、学区に温存された「差別」

まず、養正学区の成立過程とそれを包む京都市の都市形成について概観します。近世京都は、町組形成地域を囲むように穢多村・非人小屋地区が洛外に配置されていましたが、近代京都もこの境界（ほぼ旧洛中）をもって市制を実施し、市街周縁部に部落が存在する都市構造をもって成立しました。

「近代都市」を目指し、日露戦前後に産業構造の変化をみた京都市では、都市化が急速に進展し市街化地域の膨張がおこり、1918年と31年の二度にわたり大規模な市域拡張を行いました。これによって排除し続けてきた部落を市内に包摂することになり、いわゆる「八大不良住宅地区」が形成されました。このため京都市は本格的に社会事業として部落対策に着手する必要にせまられました。何より1918年に市域拡張を行った直後に崇仁・田中地区を中心に発生した米騒動は、行政



### 執筆者紹介

生駒 佳也（いこま・よしや） 徳島市立高校教諭。徳島市在住。

馬原 郁（まはら・いく） 本会世話人。左京区在住。

井上 吉郎（いのうえ・きちろう） WEBマガジン「福祉広場」編集長。北区在住。

芦田 丈司（あしだ・たけし） 京都丹波岩崎草也研究会会員・元府立須知高校教諭。福知山市在住。

湯浅 俊彦（ゆあさ・としひこ） 本会世話人。元かもがわ出版編集長。大山崎町在住。

小畑 哲雄（おばた・てつお） 元・大阪私学教職員組合委員長。八幡市在住。

当局にこのことを実感させました。市勸業課内に救済係が新設されたのはこの対応ですが、これが翌年には調査係と経営係をもつ社会課となり、さらには1940年には社会部、42年には厚生局へと機能を拡大させていきました。

その都市構造は学区制度という独自の地域組織をもとに成立していましたが、それは単に通学区域としてではなく、執行機関や議決機関をもち、地域住民の社会生活の最深基盤を形成する独立体でもありました。この中で、本来、理念としては住民生活の均衡化をはかるはずの学区区分が、市域の膨張によって、かえって学区間の格差を顕在化させることにつながり、大正期には学区制度廃止要求が出るまでにいたりました。豊かな旧市の学区と新しく編入された部落を含む学区とでは大きな所得格差が顕在し、教員の給与や学校設備までも学区で自弁する特性から、格差を是正すると期待された教育

人口増加率が市内の部落でも突出していた田中地区を含む養正学区では、児童数が増えると新たな教室が必要となりましたが、それは起債などで学区民の負担となりました。このような中で学区費軽減や学区廃止要求を掲げる水平運動や労農運動も勃興しましたが、学校・学区においても差別的視線が強化されていったとも考えられます。京都市は、税負担の均等化をはかるだけでなく、戦中にいたるまで学区の地域住民組織を基盤にし、部落対策を進展させていきました。

この学区は最終的には1941年の国民学校令にもとづいて廃止されますが、市が学区をもとに形成されている特性から、地域の課題が学校教育を媒介として浮上しやすい特性をもってき

表1 「八大不良住宅地区」世帯数（人口）推移

	1907年	1935年	1940年	1951年
楽只	163(1276)	345(1477)	443(2069)	379(1667)
養正	253(1587)	653(2975)	856(3698)	518(2000)
三条(東三条)	(2001)	955(3778)	577(2211)	464(1800)
錦林	(456)	242(1125)	247(1209)	204(834)
壬生(西三条)	(671)	185(771)	317(1406)	263(1108)
崇仁	(5396)	1815(8153)	1991(8961)	1673(6312)
竹田	217(1178)	360(1810)	420(1916)	443(1768)
深草		180(810)	263(1136)	323(1203)

京都府民生部「京都府同和地区の生活実態」1953年10月より

たといえます。他の大都市に比べて比較的戦災の少なかった京都市は、戦前の地域構造を保持させており、軍政部は「古都」京都における民主改革を断行し、それを成功モデルとしようとした。その焦点となったのが教育と部落問題でした。市は軍政部の後援のもと部落対策を進展させ、さらに新制中学校の早期設置や高校三原則の実施に代表されるような教育改革を断行し、著しい「成果」をあげましたが、学区を基盤とした部落差別は温存されました。このよ

うな中、戦後の同和教育は再開されていきました。

### 3、田中子供会の成立と活動

養正学区で始まった同和教育運動について田中子供会の成立から見えてきます。養正学区は1918年に京都市に組み入れられた後の「八大不良住宅地区」の中でも崇仁学区に次ぐ二番目の規模をもつ部落を含む学区です【表1】。人口増加率は8部落の中では最大で、周囲に工業立地が進み労働者が多数住むようになったことで、労働運動、水平運動の拠点ともなり、京都水

平社もここから生まれました。養正小学校では、戦前において既に「半島人」・「地区児童」が約半数を占め（養正国民学校『本校教育の概要』によると、「全児童1580人中、一般普通児778、地区児童520、半島人子弟282」）、戦後においてはその比率は低下したものの不就学・貧困・トラホーム・越境通学に対し対策を取る必要に迫られていました。

戦後まもなくから1952年にかけてのこれらに対する養正小学校の取り組みが、打田秀夫によって雑誌『部落』誌上で紹介されました。地区内外で2倍の差があったトラホーム罹患率を1年で半減し、長欠児童や越境児童を学校に呼び戻すことに成功した教育実践は、戦後同和教育の先駆となる報告でしたが、この報告は、それと前後する京大生吉矢友彦、また田中生の同誌上

での報告とは大きく異なっていました。すなわち、京大生らを中心とした「進歩的學生」によって田中地区において夏期学校（友の会活動）が始められたのですが、ここには「町内の反動勢力」や市当局が妨害を繰り返し、さらには対抗するように養正小学校教員によって補習学校が設置され、友の会活動の妨害に乗り出したというものです。

このことから、単に養正小学校が先進的な同和教育によって成果をあげていたのではなく、学校、教員、教員組合、解放委員会、自治会、市、学生などが教育を媒介として田中地区における政治構造に深く関わっていたことが推測されます。

田中地区において夏期学校を始めた吉矢の背景は、京大同学会にありました。1951年、同学会が制作、展示していた原爆展を田中地区に持ち込んだことから地域とつながりができました。

表2 保護者学歴（回答1007人）

学歴	父 (%)	母 (%)
未修学	4.53	6.64
小学校卒	14.59	18.78
〃 中退	1.86	2.58
高等小卒	11.05	11.24
〃 中退	0.40	0.40
中学卒	7.64	2.10
〃 中退	0.95	0.67
高専卒	2.45	0.78
〃 中退	0.17	0.00
大学卒	2.96	0.06
〃 中退	0.22	0.00

昭和23年10月調 実態調査第二部家庭調査養正小学校

た。これに同年の京大天皇事件によって処分を受けた教育学部の内山一雄が加わり、大学生たちが田中において子供会を組織したと考えられます。

これらの動きは、同じく京大生で部落解放運動に深く関わっていた田中三郎によって引き入れられ、1950年代初頭の高揚する京大の学生運動が田中地区に子供会をもたらし、京都大学と田中地区という異なる空間を結びつけたことが分かります。（この観点から見ると、京都大学は、京都市成立期の近代京都設計、市域拡大期の部落対策を含む社会事業、さらには同和教育の基盤ともなった崇仁教育、戦後における解放教育（運動）と幾重にもわたるつながりをもってきたことも分かります。）

### 4、運動を支えた京大部落研

養正学区の保護者について、『PTA会報』を中心に概観し、田中子供会が勤評闘争に参加した影響をみてみます。養正学区全体の保護者についてみると、1948年時点での学歴は、中卒以上が約16%しかおらず、また義務教育未了者がほぼ同比率いること、また借家率が高いことに大きな特色が見られます。

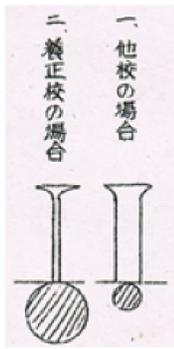
さらに（時代が少し異なりますが）、この中でも田中地区においては日雇や靴職などが多く、学区全体の傾向とは異なることもわかります【表2・表3・表4・表5】。保護者の教育への期待に

表5 田中地区職業調査

職業名	男	女	計
日雇	106	120	226
靴職	108	3	111
勤め人	101	42	143
友禅	48	20	68
商業	30	17	47
屑屋	21	4	25
飲食店	1	5	6
無職	65	286	351
土木業	7	0	7
その他	69	20	89
不明	2	2	4
計	558	519	1077

1951年8月京都大学医学部戸別聞き取り調査  
 『京都大学部落問題研究会 京都田中部落総合調査』1956年4月

図1



学校の課題は「指導者の方及び熱心な一部の方は、むしろ他校のそれに優れるとも決して劣っていないのに、惜しいかな、レベル以下の家庭や児童がとて多

は「しつけ」「衛生知識」「トラホーム対策」「補導」などが挙げられており(実態調査「学校への希望」)、打田報告による養正小学校の教育実践が、これら保護者の同調圧力をも背景としていたことが判明します。このPTA会長には学区内の京大を中心とした大学関係者が就いており(1949〜59年の会長9人中7人)、少数の知識層が役員を構成し、教員と協力しながら「対策」としての同和教育を推進していったことが類推されます。このことは京大部落研文書(1961年頃と推測)

の「田中の親はPTAに参加していない」との記述とも符合します。10年間にわたる会報には不思議なことに「同和」の言葉が全く登場しませんが、それは「補導」「しつけ」「衛生」などによって象徴され、学区外との「平等」を保つために必要な「対策」ととられ、会報に散見する京大教員の記事によって「民主主義」概念として敷衍化されてきました。中でも、当時PTA児童委員長善波周(京大教員)の巻頭言「私たちは何をすべきでしょう」は、保護者や教員の意識をよく表しています。ここでは養正小学校の課題は「指導者の方及び熱心な一部の方は、むしろ他校のそれに優れるとも決して劣っていないのに、惜しいかな、レベル以下の家庭や児童がとて多

表3 保護者職業 (1007人)

職業	%
商業	17.58
手工業	16.39
会社員	14.80
土木業	10.83
官公吏	8.44
自由	7.55
工業	6.06
日雇	5.06
交通運輸	3.38
事業主	1.09
農業	0.70
その他	8.00

昭和23年10月調査 実態調査第二部  
 家庭調査養正小学校

表4 住宅

借家	75.0%
自宅	18.0%
間借	6.0%
官舎	1.0%

昭和23年10月調査 実態調査第二部  
 家庭調査養正小学校

い」とイラスト入りで指摘しています【図1】。

このような中に京大生によって別の「民主主義」が持ち込まれ、子供会を組織しました。学校は対抗するようにPTA主催の夏期学校を用意し、これを補完するように「補導委員会」を立ち上げ、市当局も「補導対策」としてこれを隣保館事業に組み入れます(校内組織においても、「朝鮮人教育」「道徳教育」は研究部に属していますが、「同和教育」は補導部に属してしました)。やがて京大生たちが組織した子供会活動が高揚し、「教育闘争」として展開するに及んで、部落外の保護者との間に距離が置かれていくようになったと考えられます。

『PTA会報』に初めて「同和」の言葉が登場したのは、この夏期学校をめぐる対立の時でした。大將軍小学校から組合派遣として「田中の夏期学校」に参加した池田正太郎(後の京都市教育長)は、「学校やPTA主催の夏期学校がありながら、別にこうしてひらかなくてもならない根本のもんだいはPTAとしても大きくとりあげるべきことではないか」との苦言として「同和」問題を取り上げました。

こうしてみると、学校と一体化し、ほぼ全員組合の形をとる教員組合(京教組)と同和教育、解放運動の関係が地域を媒介すると複雑であったことが判明します。京都においては他府県教組と異なり、単独講和、教育二法、

任命制地教委、勤務評定、警職法への反対の合意は容易であり、養正学区においても知識人を役員とするPTAの賛同も得やすかったと考えられます。また、いち早く「対策」としての同和教育を推進してきましたが、しかし、学校や組織を離れ、部落を含む学区という空間において、地元小学校教員が同和(解放)教育運動を展開するのは困難だったと思われます。

勤評闘争において大きな運動を展開した愛媛県や高知県においては、小学校教員が教員組合を梃子に地域のインテリとして、地域支配層と対抗し、運動を広げる役割を担いましたが、養正学区においては、大学教員や京大生たちが既に知識人として入り込んでいました(養正小学校の)先生方からよく東樋ノ口町はインテリ階級が多いのでやり難くってねと聞かされる状態と会報に記されています。運動に地元教員が見えないのは、地域におけるインテリとして、また地域を拠点に社会運動を展開する存在としても動きがとれず、PTA主導者に代表される価値観の範囲で学校における同和教育を推進したことが予想されます。

一方、この過程は、京都においてほとんど田中地区にしか地盤がなかった解放委員会が、運動の拠点として行政当局との間にパイプを作ろうとした時期であり、現実に教育闘争によって地域運動を巻き起こし、教科書だけでなく共同水栓、改良住宅を獲得していく期

間でもありました。これらの闘争によって会報には全く登場しない「オールロマンス事件」の成果が現実化していききました。

既に1953年1月、田中子供会は20名の代表者が市役所にデモを行い、福利課に図書館の設置、運動用具の支給、文化活動に必要なものの支給、進学対策の確立、給食費値上げに対する補助などを要求し、図書購入、卓球台設置、スポーツ用品購入を確約させていました。また、これを皮切りに、部落解放全国委員会京都府連合会（京都府連）、京教組、自由労組、朝鮮人団体教育連盟との四者共闘が成立し、教科書無償、就学奨励費、給食費、民族教育などを要求し、運動は新たな展

開を見せるようになっていました。また、「おれたちのPTAをつくろう」と「子供を守る親の会」が結成され、1954年12月には子供会活動の中から卒業生を中心に青年部（青年友の会）が生まれ、学生から「歌とおどり」を習うなどサークル活動を展開し、井上清（当時解放委員会中央委員）から「部落の歴史」を学ぶ学習会をもつてきていました。

勤評闘争への田中子供会の参加はこのような時代の文脈に位置づけられると思われます。同盟休校を実現した1958年7月8日〜10日（この日程は京教組の休暇闘争の1日前に設定されています）に間に合わせるように京大部落研（教員）が誕生し、運動を

### 夕刊京都

夕刊京都新聞社  
京都府京都市中京区  
電話 377-1111

## 京の勤評闘争いよいよ最高潮

### 『差別』へ強い憤り

#### 興奮の生徒 校長へ詰めよる

同盟休校突入 京大高野校の中等で勤務の教員が勤評闘争に突入した。生徒らは興奮のあまり、校長に詰めよる様子。

### 目立つ「空席」

学童府教委らと回交へ

### 抜打ち実施せず

あすの休暇戦術に警告

「夕刊京都」

理論的にも支えましました。子供会メンバーは養正小学校・高野中学校だけでなく、京都府・市とも交渉し、就職保障や教員増員などの成果を獲得しました【表6】。その後、勤評反対共闘の各集会には、子供会の代表者たちは演説に立つ一方、蜷川知事との交渉も行い、教育条件改善や就職保障などを訴えました。

また、9月の日教組統一行動に対しても、田中子供会は学校側に対して申入れを行い、府下では鴨沂・洛北高校と高野中学のみが授業を停止し、高野中学では全校生徒大会が開かれました。革新府政のもと、特に文化人学者を含めた広範な共闘を組んだ京都の勤評闘争は、田中子供会の活躍もあって、愛媛、和歌山、高知のような全面対決には至らず、1960年3月鈴木教育長（中央派遣）が転出することで事実上の終結をみました。

この間、『PTA会報』は勤評への論評は出しますが、地元の田中子供会については沈黙を続けます。やっと半年後に現れた反応は、冷ややかなもの

日付	内容
7月4日	京大に学生の部落問題研究会が井上清を顧問として発足。翌日には朝田善之助宅にて京大セツルメント、立命館大学部落研とともに勤評闘争について話し合い。
7月5日	田中支部で勤評反対町民大会（約200人、給食費をただにせよ、保育料値上げ反対、生活保護打ち切り反対、アパートをazole、隣保館を建てよ、日雇の就労日数を増やせ、差別勤評反対のスローガンを決議）
7月6日	田中子供会が勤評反対教育環境改善子供大会を開催（教科書・学用品・給食費の無償化、旅行・遠足費の補助、進学のための奨学金、中卒後の就職保証、教員数増加、差別をする勤評反対、を決議、3日間の同盟休校を可決）
7月7日	田中子供会が高野中学校に期末試験の延期を申入れ、臨時生徒総会開催、田中子供会代表駒井順治氏が勤評反対と同盟休校について説明。
7月8日	養正小学校255名、高野中学校129名が欠席届けを出し同盟休校に突入。田中地区広場にテントが設けられ、京大、立命館大、同志社大の部落研25人と、市教組から応援の22人の教員によって補習授業実施。子供会代表が養正小・高野中校長と交渉。午後から府庁までデモ行進、府教委と団体交渉。
7月9日	養正小・高野中408人同盟休校。朝鮮人生徒も民族学級を求め55人が休校。高野中学では地区生徒要望により授業を打ち切り。
7月10日	養正小・高野中370人が同盟休校。両校は臨時休校。小学4年生以上は府教育庁で教育委員長・教育長と交渉。就職の際の身元保証、勤評は新学期まで実施しない、新学期から33人の教員増員などを約束。その後、3日間の反省会、勤評闘争の進め方についての討議。

表6

でした。そこでは運動は学区外との「平等」のための亀裂になるとらえていました。

さらに、子供会の闘争自体も解放運動の「操り」と映っていました。勤評闘争と、田中子供会の運動は分けて扱われ、半年後になって初めて批判として現れたのです。「同和」の語が1952年にはじめて『PTA会報』にもたらされて以降も、勤評闘争にいたるまで、ほとんど使われることはありませんでしたが、勤評後、よ

うやく「同和教育」の語が現れ始め、1959年3月に初めて「部落」の文字が登場しています。

ここから見えることは、「同和」に期待された「平等」観は、扱い・扱われ方の平等で、デモをすることでそこに違いが顕在化するととらえ、他学区との扱われ方に差が生じると感じていることです。そのため地元学区内においては、補導を徹底し、児童会を通じて家庭教育や躰をいきわたらせる運動を広げ、ひいてはそれが「学力」に反映することで、他学区と同じ扱いを受けることを期待しています。保護者や学区民は、学区外との「平等」を求め、このための対策を必要としたのでしよう。これを乱すトラホームや不就学は保護者にとっても学校にとっても克服すべき課題であり、また越境は逃亡と映ったと思われまます。

学区の多くの保護者や教員にとって同和教育は、社会に反省を迫って部落と部落外との「同和」を図るための準備教育であり、必ずしも部落を含む地域社会を拠点にする必要はありませんでした。この意味で、理念として広められた「民主主義」と同居することも可能でした。「学級自治会」「児童会」はその訓練の場でしたし、インテリが多数住む養正学区では理念の敷衍は容易でした。また、地域や社会全般を対象とするために個別の部落や学区を越えて、市や府、また全国に広める必要もあつたため、教員組合との共闘も可

能でした(特に京教組は日教組においても際立った組織力を誇っており、京都総評の有力な一員でしたし、既に1950年に成立していた京都民統は、高山市長、蜷川府知事を誕生させる組織力をもっていました)。

しかし、田中地区で始まった教育運動は、部落を拠点にし、また自分たちの住む学区という地域空間自体を対象とし、子供や地区住民を組織して、同時に差別を容認する社会に対し直接に働きかける運動でした。「一般の父兄の理想として一応正常のコースを行って京大に入るという希望」を持つている保護者の教育観は、既に隣接する京都大学でおこった天皇事件や全学スト、反政府デモなどへの批判的記事として表れていました。特に連日テレビや新聞で全国的に報道された地元での勤評闘争は、多くの学区住民にとって好ましくない運動と映ったと思われまます。

しかし、一方、田中の子供会では、毎日の反省会において個々の疑問を追求し、社会的思考を身につける訓練を積んでいきましたし、また京大生たちからもたらされた学校や教員、さらには社会さえ相対化する思想は、社会的行動を容易にしたと考えられます。勤評闘争を経験した田中子供会出身者は、その後、高野中学校においても生徒会役員を独占するようになりました。また、学生たちからだけでなく井上清や奈良本辰也など多くの知識人から得た

刺激は、進学すれば新しい世界が開かれることを予見させ、多数のメンバーが従来とは異なり高校に進学し、部落研を創設し運動を続けました。やがてその中心的なメンバーは、京都市に就職し、各職場では田中出身というだけで、即戦力として組合活動に組み入れられたと言います。

この勤評闘争の最中、解放同盟田中支部は地域自治会の掌握に乗り出し、これに成功し、やがて自治会自体を解散し、行政とのパイプを独占しました(詳しくは、杉本弘幸『近代日本の都市社会政策とマイノリティ』思文閣、2015参照)。この間、子供会メンバーは高知の勤評闘争にオルグに入り、また大阪の部落の子供会とも連携をとるようになり、地区・学区の枠を越えて新しい世界を知ることになっていきました。

しかし、地区を掌握した田中支部の中では深刻な対立が表面化してきました。運動方針をめぐって、朝田と彼に反対する三木・塚本・藤谷らが衝突しました。この分裂は、朝田宅を溜り場としてきた京大生、大学教員をはじめとする知識人、地区住民をも分裂に導きました。子供会メンバーにとって、新しい世界の獲得は、解放運動に内在する矛盾に気づく過程でもあり、その後、彼ら彼女らも運動の分裂に巻き込まれていきます。この分裂は、田中地区の地域社会自体のあり方を大きく変えていきました(さらにはそれだけで

なく、全国的な解放運動のあり方、それをめぐる行政施策のあり方も大きく変えていきました)。

## 5、運動と地区住民の分裂

近現代を通じて水平運動・解放運動を先導した京都の部落は、近世近代と続いた都市空間における成立要因が大きく影響していました。中でも都市空間膨張過程で形成された8部落のうち、学区≒部落(崇仁)ではなく、学区のほぼ三分の一の空間に部落が存在し、労働運動、学生運動なども接近しやすかつた田中地区がこの運動を牽引しました。特に部落問題は部落内だけでなく部落外住民にとっても、また行政当局にとっても克服の課題でしたが、その解決のあり方をめぐり三者やそれを囲む知識人、運動体はそれぞれ固有の結びつき方を展開していきました。

戦後、京大生が接近することで子供会活動を基軸に解放運動を展開した田中地区は、勤評闘争に参加する中で地域の主導権を確立しました。しかし、その影響を肥大化させる過程で運動は分裂し、子供会を始め、それを取りまく知識人層や運動体、さらには地区住民も分裂し、地域社会のあり方を容容させていきました。

1950年代において養正学区、あるいは田中地区において展開された同和教育運動は、地域社会にこうした政治的磁場が成立する空間を生み出したと考えられます。(中見出しは編集部)

# 随想

合唱では序盤に「石井中将閣下の

命なれば一切他言無用！」と強く歌います。七三一部隊員への戒めは戦後も守られました。世界的に禁止されている細菌戦、生体実験を行った七三一部隊の石井中将等は実験の資料を米国に渡すことで戦犯を免れ、戦後の医学界に君臨したことは周知の事実です。

## 731部隊の実相を告発 中国で混成合唱組曲「悪魔の飽食」を歌う

馬原 郁 (本会世話人)

作家 森

村誠一氏が身近な人からその実態を漏れ聞き、一人のジャーナリストと共に隊員を訪ね歩き、現地にも行って『悪魔の飽食』という本になり、神戸の田中嘉治氏の努力で池辺晋一郎氏が合唱組曲にしました。

重かった医師の口から聞いたのは実に37年も経ってからでした。「夜毎枕辺に立つはマルタの亡霊」と弱く歌います。部隊では拉致した人間をマルタとよびました。人間の心を取り戻した元隊員が森村氏に語り涙を流しますが、それは戦後37年も経った時です。「流す涙は届かない、37

年目」と合唱が悲しげに響きます。普通はピアノですがその町にオーケストラがあれば共演になりますからオーケストラの鐘が静かに演奏され、池辺晋一郎作曲と彼自身の指揮が冴えます。

拉致した人間は老若男女、人種、国籍、年齢、体格も多様で、実験の種類も病名も数知れませんが、三千人が犠牲になりました。合唱では「マルタ」の反乱や「もしもあなたが私の娘に会ったら……」と父親のせつない頼み、毒ガスから子どもを庇う母親マルタ(俳優座の女優)

優)と子どもの演技があり……と舞台は七三一部隊の実態を歌っています。第7章では「科学を悪魔に渡してはならない……一人になつてはならない、私たちは集まろう」と声高らかに歌います。9月、ハルビンの731罪証陳列館の記念行事には日本から275人、京都から22人が中国から財政の援助も少し受けて参加しました。今の日本政府はすぐ中国を悪くいつて軍備を……といいますが、私たちは仲良くしたいと思っています。

# 悼 山内久さん

脚本家

脚本家の山内久(やまのうちのひさし)さんが9月29日、90歳で亡くなられた。映画『エイジアンブルー』 浮島丸サコ

京都・舞鶴湾で爆沈した浮島丸事件をテーマとする映画をつくることが決まっていただけで、監督も脚本もスタッフもすべてが白紙だった。山内さんは、僕らの話を聞いてくださり、熱心に質問もしてくださった。昼過ぎに始まった3人の話し合いは、和室が暗くなるまで続いた。脚本を書くことを引き受けてくださり、監督に堀川弘通さんを推薦してくれた。



当時、日本シナリオ作家協会の理事長という要職にあった山内さんではあったが、誠にフレンドリーだった。初対面の僕の、青臭い論に耳を貸して下さった。旧軍経験がある山内さんにとって、加害の歴史を正面から描くシナリオが頭に浮かんだのだろうか。

12月6日に上映会  
立命大朱雀キャンパスで

『エイジアンブルー』の上映(12月6日(日)2時、立命大朱雀キャンパス)は、戦後70年に加えて、山内久追悼の機会にもなる。

(井上吉郎)「福祉広場」編集長

## 映画『エイジアンブルー』の脚本書く

ン(堀川弘通監督)の脚本を、今井邦博さんとともにつくってくださった。僕にとって、山内さんは「若者たち」の山内さんで、遠くから仰ぎ見るような人だった。その人と会うことができる。映画製作者につれられて、京都から鎌倉のご自宅を訪ねたのは23年前の1992年のことだった。

# 「岩崎革也日記」を読む

芦田 文司（京都丹波岩崎革也研究会会員）

## 一、岩崎革也の初期社会主義 とのかわり

明治30年代半ばから初期社会主義者の幸徳秋水や堺利彦らの運動に資金的援助などを行った人物の中に、京都府丹波の岩崎革也がいたことが知られている。岩崎革也は須知村（現京丹波町）に1869（明治2）年に生まれ（名は茂三郎）、1943（昭和18）年に74歳で没した。岩崎家は名望家であるとともに大地主で年に小作米が400石を超えていた頃があるという。

さらに酒造業も営んでいた。革也の父藤三郎は一時傾きかけた家勢をその才能と実力で盛り返し、須知銀行を1894（明治27）年に開設した。と



岩崎革也

ころが、翌年藤三郎が死去したため革也が岩崎家の経済を維持する中心にならざるを得なかった。

革也は若くして1900（明治33）年に須知村会に推挙され31歳で村長になる（翌年町制が施かれ初代町長となる）。丹波地方の経済と政治を左右する立場になったのだ。だが、革也は病気がちであったため1902（明治35）年12月に町長を辞任した。

翌1903年4月、革也は長女きぬの教育のため、東京の姻戚関係者が校長の高等女学校に入学させた。このため、革也はしばしば東京と丹波を往來することになる。同年5月に戸籍上の名である茂三郎を革也と改める。革也は小学校を卒業後、井上半介が主宰する全寮制の発蒙館に入学し漢学、自由民権、キリスト教などの影響を受けた。また読書家でもあり、多くの書籍に親しんだ。蔵書も千冊近く残されている。東京に往き来することにより、さらに読書熱が昂じ広く社会正義や社

会主義関係書を読むにいたった。

明治30年代半ばは社会主義関係書が多く出版されており、当時の幸徳秋水の著作も読んでいたようだ。蔵書中に幸徳秋水著『続一年有半』（博文館、明治35年）、『社会主義真髓』（朝報社、明治36年）、『廿世紀の怪物帝国主義』（警醒社書店、明治36年）などが存在する。1903（明治36）年10月にはロシア撃つべしと主戦論が興る。万朝報が主戦論に転じたため、社員であった幸徳と堺は退社し、非戦平和の平民社を組織し11月15日に週刊「平民新聞」を創刊した。革也はその第8号（1904年1月3日付）に「社会主義は正義人道の為め尊奉すべきもの実践行なざるべからざるものと確信す」などと広告を出したのを皮切りに何度か広告を出し、また平民社に額面千円（時価700万円）の公債を寄付した。堺利彦や他の社会主義者にも何度も金銭的援助を行ったのである。

## 二、岩崎邸の撤去と残さ

れた『岩崎革也日記』

京都縦貫道が今夏7月に丹波と和知のインター間が開通した。岩崎邸は縦貫道の真下に存在したため、

2013年10月下旬に解体撤去された。その岩崎邸は1882（明治15）年上棟の棟札によると築130年経過したものであった。それゆえ邸内には多くの史資料が保存されていた。2010年8月に須知高校に關係した教員たち6人が岩崎革也を顕彰するとともに関係史資料を保存したいとの思いから集まった。その後この会を「京丹波岩崎革也研究会」（略称革也研）と称し、講演会、岩崎邸見学会などを重ねてきた。これらの取り組みについては、同研究会が『京都丹波・岩崎革也旧邸の史資料保存の取り組み』（2014年1月発行）にまとめている。なお、史資料類は岩崎長氏（現岩崎家当主）がすべて南丹市立文化博物館に寄贈された。

史資料類には重要なものが数多く含まれている。中でも目を引くのは各也が書き続けてきた日記が約30冊存在したことだ。岩崎長氏は以前は公開を了解されなかったが、歴史的資料としての重要性等に基づき公開に同意された。少し期間をおいて革也研はこの日記を判読する作業にとりかかった。部分的ではあるが、革也の思想や交流、地方の政治や経済、時代の移りゆき、その他などを各自の分担をプリントにして検討をおこなった。この作業は2015年7月にほぼ終えることができた。

『岩崎革也日記』として残存するものは1917（大正6）年以降である。

## 国内外情勢に深い関心

この年革也は48歳。残念ながらそれ以前、とりわけ明治30年代半ば以降の幸徳秋水や堺利彦ら平民社との関係や革也の思想的变化がわかる時代の日記は見当たらない。革也研としても岩崎邸が姿を消す直前の2013年9月に邸内くまなく探したが発見にいたらなかった。もともとなかったのか、あったが革也が処分していたのかは不明としなければならぬ。この間の日記があれば革也の思想的背景やその動向を把握できたであろうが、それが存在しなかったのだ。

### 三、『岩崎革也日記』の 主な内容

『岩崎革也日記』には種々なことが豊かな語彙と表現力によって記述されている。主として次のような諸点に筆が及んでいる。

- 1、須知銀行の頭取としての経営に關わる事が記事には多く登場する。
- 2、金融恐慌や世界恐慌によって銀行経営が困難になり、革也はこれに大きな力を注ぐことになる。また1933(昭和7)年は三度目の町長在任中であつたが、経営に専念するため辞職を余儀なくされた。以降、革也は銀行取締役たちとともに懸命の努力を払ったが、ついに1937(昭和12)年に中丹銀行に買収されてしまった。その後の破産整理もふくめ、革也と銀行幹部の努力が抽出

## 丹波の動向も魅力的に



岩崎邸に残された革也の「日記」

- 3、社会主義者との交流は革也宛書簡が400通近く存在していることから部分的に知ることができる。日記にも多くはないが著者との交流や読書記が記されている。また、革也の文化知識人としての側面がうかがうことができる。
- 4、地方政治家としての革也は、町長、町会議員、府会議員などで活動した。特に府会議員として傾注した具体的内容を知ることができる。さらに地方の政治行政に隠然たる力を保持していた実態を見ることが出来る。
- 5、新聞や雑誌などを通じて政治経済、社会の動き、国際情勢、あるいは国会議員たちの言動などに常に目を配り、日記に掲載している。何に關心を寄せていたかがわかる。
- 6、丹波地方の出来事、取り組み、農業や気象状況、米価や収穫量などをはじめ種々のことを記録している。近代史あるいは地方史を研究していくうえで魅力に富んだ記述が数多い。
- 7、革也はしばしば幾種類かの持病に苦しんだ。町長を三度経験するがいずれも途中で辞職し、満期まで勤めることができなかった。どのような病状で、どの程度の頻度であったかなども記事から知ることが出来る。
- 8、実生活や人々との交流、仕事や人間関係等を通じて、革也の人間性

という側面がうかがうことができ  
て興味深い。

### 四、『岩崎革也日記』の 刊行を目ざして

『岩崎革也日記』全巻を書物にすることは大部なものになり、今日の出版事情では難しい。縮刷版でも発行できないかと革也研で検討している。おそらく出版社が二の足を踏むに違いない。自費出版となれば革也研で担うことが出来るか不安が伴うが、なんとか実現したいと思っている。出版にあたって「京都の民主運動史を語る会」の諸氏のご経験または耳よりの情報などお聞かせいただければ幸いである。

### ◆ 原稿募集 ◆

「忘れ得ぬひと」「闘いの記録」「エッセイ」など、会員の皆さんからの原稿を募集しています。書き遺しておきたいことをぜひ「燎原」に。テーマ、字数は問いません。

「燎原」編集部

# 発掘 戦後70年

## 1946年 京都で刊行された雑誌 『時論』と嬉野満洲雄

湯浅俊彦（本会世話人）

読売新聞の論説委員をしていた嬉野満洲雄は、1946年1月、京都で創刊された月刊総合誌『時論』の編集長として迎えられた。迎えたのは大雅堂の社長・田村敬男。田村は戦前からの活動家や書店や出版事業を展開し、業界でも影響を持ち、大雅堂も戦時中の「企業統合」で生まれた出版社であった。田村は戦後すぐに総合雑誌の発行を企画した。

### 大岩誠京大助教授の要請で

嬉野は日露戦後2年目の1907年満洲・大連で生まれた。そのため満洲雄と名付けられた。父は医師、一家が郷里の佐賀へ帰ったのは中学進学時だった。

一高に入学、社会科学研究会に入会し、京浜の労働組合に応援に出かけていた。1929年春、東大の経済学部に進学したものの4・16事件で検挙され東大を中退、1930年から33年にかけて、パリ大学、ベルリン大学に学び、のち読売新聞社に入り、36年から3年間中国で取材活動、39年〜45年の

第二次大戦中、ナチスの全面解体まで、ベルリンを中心としたヨーロッパ特派員だった。

戦後、読売争議が起こり、正力社長がA級戦犯として巣鴨に収監される状況のもと嬉野は退職し、『時論』編集長就任のため京都に引越す。

嬉野を田村に紹介したのは元京大助教授大岩誠であった。嬉野が大岩と知り合ったのは4・16事件で東大を退学、叔父に当たる元京大法学部の織田萬が、当時ハーグの国際司法裁判所の判事で、その保証でパリに留学したからという。織田が弟子の大岩を嬉野に引き合わせたのだ。その大岩の「熱心なご紹介だから私は田村さんにお会いしました」と嬉野は書いている。

『時論』は当初、大雅堂の発行だったが、田村が公職追放で辞任、同時に廃刊となった。その後京都新聞が「用紙配給権1万5千ポンドの無償譲渡」を条件に継承することとなった。その際、田村は「私が三顧の礼をもって迎えた嬉野編集長らの就業保障」を申し出、株式会社時論社（資本金10万円）

は設立された。発起人の白石古京（京都新聞）が3万5千円、次いで2万円を嬉野が出資している。ちなみに嬉野の住所は上京区平野八丁柳町、これは渡邊元治（肛門科医）の家で、嬉野は元治の叔父にあたる。生前、渡邊は「満洲雄叔父から一番影響を受けた」と語っていた。

### 創刊号は新憲法特集

嬉野は読売の新社長らの「地方での総合誌発行は成功しない」という引き止めにもかかわらず「感ずるところがあり田村さんの勧誘に応じた」（『或る生きざまの軌跡』田村敬男編）と書いている。

『時論』はどんな雑誌だったのか。府立図書館で調べてみた。残念ながら大雅堂発行の創刊号はなく、1947年2月、時論社発行の第2号から49年7月号（第4巻6・7合併号）までが欠号もあるものの保存されていた。紙不足でいわゆる仙花紙を使用、A5判112ページであった。編集人は嬉野



東京・世田谷の自宅で。1975年頃

満洲雄、発行人は白石古京、烏丸夷川上ル（株）時論社発行である。

京都新聞社の「社史」には、「多角経営の一端として、評論雑誌『時論』を創刊したのは、敗戦直後の昭和21年10月であった。戦前の宗教雑誌『自照』を改題して、大雅堂が刊行を企画していたが、用紙不足から実現できずにいた。京都新聞がこれを引き継いだのである。それと同時に、発行所を大雅堂から時論社に変更し、発行所を本社に置いた」と記述されている。つまり大雅堂からは計画だけで発行されていないと記述されている。

「創刊号は、憲法特集で、田畑忍・佐藤功・加藤勘十らが執筆し、関西論壇の先進的な論評の場になったが1950年4月で終刊になった」（『京都新聞社史』）。

47年2月号の「後記」に「出版事情の困難なことは全く言語に絶するものがある。しかし吾々はこの仕事に意義を見出す以上は読者諸賢と共にひとすじの道を直進する覚悟である」とある。嬉野氏の文であろう。この号には、湯浅八郎（前同志社総長）が「アメリカ民主主義の本質」を、中西功が「労働攻勢の意義」、新村猛（人文学園学長）、能勢克男（弁護士）らが寄稿、藤森成吉の連載小説、上村松園の随想など多彩である。広谷豊は「引揚者問題の核心」の中で加害者責任にも言及している。

3・4合併号（47年4月）では名和

統一、上田作之助、壺井繁治ら、5号には湯川秀樹、伊藤律、布施辰治も執筆している。湯川は「九州大学教授」の肩書である。その後も、鈴木茂三郎、島恭彦、小椋広勝、河原崎長十郎、山代ともえ、加地亘、津田青楓、田中竹男、清水幾太郎、真下信一、野間宏、宮城音彌、徳永直、服部之総、北條誠ら関西だけでなく全国的に著名な文化人が登場している。おそらく嬉野人脈が力を発揮していたのであろう。

嬉野は自ら夜行列車で東京へ出かけ原稿の依頼をした。座席もない込みようの中、友人の本屋さんから頼まれた原稿を執筆する。それは、ドイツや日本が勝たずによかった『勝利を惧れる』という題で出版(共立書房)され、ポーン賞を受賞するほどの好著だった。(この本は絶版だったが20年ほど前、渡邊元治が「復刻」刊行し周辺の人々に配った)

この頃、民主主義科学者協会(民科)京都支部が結成され活発な活動を展開していたが、『時論』寄稿のメンバーと重なる。

### 米占領下、再び冬の時代に

読売の馬場新社長は「新聞なら地方でよいものがあるが、総合誌で成功した例は欧米にも少ない」と嬉野の退職に際し翻意を求めたという。結果として馬場の危惧は当たった。

発刊当初、『時論』は数万のまずまずの売れ行きだった(嬉野の回想)。



紙不足の中でも、戦後の言論出版の自由を謳歌していた。しかし、冷戦の進行とともにアメリカの占領政策は一転し、「関西では大阪に検閲部ができ、毎号ひどく削除され、××または空白で出してはいけないということであらう」打撃を受けました」と嬉野は書いている。大山郁夫や湯浅八郎の演説の特集もばつさり、アメリカ批判は許されなかった。再び戦前と同じ状況に戻った。

京都新聞側とも毎号のように論争が続き、結局「時論社の株主総会の決定をまわって編集者をかえる。あなたが望むなら京都新聞の論説に移り、あとの人々は当方で保障します」ということ

だったが、嬉野は断り、社員の世話をした上で帰京、平野義太郎の世界経済研究所に入り、のち読売の要請で同社に復帰する。パリ特派員、論説委員、ロンドン総局長、NHK解説委員などを歴任した。

『時論』は京都新聞に引き取られたものの50年4月に廃刊となった。

### 嬉野を支えた編集者たち

京都時代、田村の大雅堂には嬉野だけでなく、田畑弘(のち三一書房)、栗原佑ら優秀な編集者がいた。同時にこの頃、京都における出版活動はまさに百花繚乱だった。『時論』に載った書籍広告を見ても、作品出版社(上京)、全国書房(中京)、世界文学社(中京)、高桐書院(中京)、日本科学社(中京)、三一書房(左京)、白井書房(左京)、大八洲出版(左京)、関書院(東山)など今では知られてない版元がほとんどである。

しかし、時代はレッドパージに見られるように急速に右傾化、出版も東京一極に集中していき多くが本社を東京に移すか廃業してしまった。

しかし嬉野が戦後の一時期、京都の言論界に遺した功績は忘れてはならないだろう。(文中敬称略)

◇ (参考文献 『或る生きざまの軌跡』 『続或る生きざまの軌跡』 田村敬男編、1980年、『反共主義 歴史の教訓』 共産党出版局 1975年など)

## 『燎原』の合本「電子ブック版」発売中!

CD-ROM版 各巻価格 3000円(送料共)

- 第1巻 (創刊号から第50号)
- 第2巻 (第51号～第100号)
- 第3巻 (第101号～第150号)
- 第4巻 (第151号～第200号)

\*ご希望の方は、事務局まで電話またはFAXでお申し込みください。

京都の民主運動史を語る会 TEL&FAX 075-722-3823 (井手方)

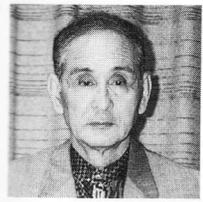


# 「京大反戦平和詩集」

## の「うぶ」も

(2)

小畑 哲雄



その小野君のために、「反戦平和詩集 第三号」に「小野君に」と題した詩を載せている。

はじめて私が

この時計台の下にやってきたとき

君の姿はもうなかった。

とがった爪の先から血をしたたらせ

た黒い手が、

あつい壁のあなたに

君をひっきりさらって行ったあとだけ

た。

平和と独立の敵に対する憎しみは、その壁をも貫きとおして、友情のきづなをかため、強める。

その友情と憎しみとが

焰のようにもえさかり

あつい壁をやきつくし、

黒い手をやきつくし、

君を私たちの手にうばい返す

その日は決して遠くはない。

友よ

勝利の日は近い、

その日まで、

あつい壁の中に

憎しみの焰をもやしつづけてくれ。

私たちもまた

黒い手にむかって

日本人であることを忘れた恥知らず

どもにむかって

闘いをつづけるであろう。

闘いをつづけるであろう。

闘いをつづけるであろう。

**学生大会の席で朗読され**

**抗議ストライキの決議も**

実は、この詩は、印刷され、「反戦

平和詩集」第三号として出る前に、文

学部の学生大会の席で紹介され、朗読

されていたのである。「僕の手元にこ

んな詩が来ています」と言って、朗読

したのは、私と同じく臨時編入で英文

に入った旧制浪速高校出身の東良陸広

「占領政策批判」で重労働2年、  
「小野君に」の詩で励ます

鶴見俊輔さんが亡くなった。NHKのEテレが追悼番組として、何年か前に、鶴見さんが自分のことを語った番組を再放送していた。その中で、一九五一年に京都大学人文科学研究所助教授となったところのことを語っておられた。

「学生たちがね、沖繩に送られることも覚悟して『原爆展』をやったんだよ」

それがきっかけになって、原水爆禁止などの運動にかかわるようになって、という話になっていた。その時の画面には、私たち京大同学会が取り組んだ「綜合原爆展」のパネルの写真などが写っていた。川合二良・葉子夫妻を代表とする「原爆展掘り起こしの会」が提供したものである。

「沖繩に送られる」かどうかは別にして、「占領下」に原爆展をやる、ということに、何のためらいもなかったか、と言えば、やはりそれなりの覚

悟、のようなものは、少なくとも私にはあった。現に、その当時、京大の学生がひとり、「占領政策違反」でアメリカ軍による軍事裁判にかけられ、「重労働二年」の刑が確定して、沖繩ではないが、山科の刑務所で服役していた。文学部三回生の小野信爾君である。捕まったときはまだ二回生であったから、教養課程で吉田分校に在籍していた。

一九五一年春、私が京大に入学したころ、分校の主事たちが小野君のご両親に「自主退学」をすすめている、というような記事が「学園新聞」の紙上にしばしば見られていた。前にも書いたかもしれないが、そのころの京大の処分には、「退学」というのはなかった。「停学」の次が「放学」で、これは、「復学」への道を完全にシャットアウトするだけでなく、京都大学に在籍して取得した「単位」なども完全に消滅、という、いわば「極刑」であった。そこまではいかないが、「非」を認めておとなしく京大から出ていけ、というわけである。私はまだ会ったこともない、

あつい壁のあなたに  
君をひっきりさらって行ったあとだけ  
た。

だが、その日から

君の名前は

まるで私にとってもっとも親しい友

でもあるかのように、

私の目に入り、

私の耳に聞こえ、

私の口から語られている。

平和と独立のピラをまいたという、

ただそれだけのことで

重労働二年の判決を下した。

その黒い手の持ち主は、

さらに

日本人であることを忘れた恥知らず

どもをそそのかして、

君の名前を

この時計台の下から抹殺しようとし

ている。

しかし

君と私たちの間にそびえる壁がいかに

にあつくとも

君である。のちに、俳優「戸浦六広」として大島渚監督の映画「戦場のメリークリスマス」などに出演することになるが、彼が実に思いを込めて朗読してくれたのである。

その時私は、その学生大会の議長席に座っていた。自分の詩が朗読されるのを、まるで他人事のような顔をして聞いていたのである。そして、議論が進む中で、「大学が小野君に対して、処分をする場合には、ストライキをもって抗議する」という決議が満場一致で採択された。

なぜ、そんな芝居があったことをしたのか、と言うとそれにはそれなりの理由があったのである。その当時の京大では、学生大会がストライキを決議すると、その時点で提案者、多くの場合、自治会の委員長、それと大会の議長、この二人がほとんど自動的に「処分」されることになっていたのである。それは、前年の秋に出された「告示九号」によるものであった。「本学はストライキを禁止する」と、そこには書かれていた。

しかし、アメリカ占領軍のイールズという男が全国の大学をまわって「赤い教授を大学から追放せよ」と演説しているときに、そして大学以外の全産業で「レッドパージ」の嵐が吹きまわっていた時に、ごく一部を除いて、「レッドパージ」を阻止しえたのは、大学の教員だけであった。共産党の五〇年問題をめぐる、全学連の中での対立も

はげしかったが、レッドパージ反対の一点では、力を合わせてたたかった。その実力行使としての「ストライキ」に、京大当局は、無慈悲、と言っているほどの「弾圧」を加えていた。五年に京大に入学した私が、京大内に「被処分者」と、「被告」の多いのに驚いたのは、そういういきさつがあったからである（被告は、ほとんどが「公安条例違反」、それと「公務執行妨害」の容疑で裁判にかけられていた）。

そういうわけでストライキを議決する予定の学生大会の議長を誰がするか、の相談は前もってしておく必要があるが、新参者の私は割と簡単にそれを引き受けた。「五〇年問題」という「嵐」を潜り抜けてきた私には、「少々のことでは、驚かない」と言う「くそ度胸」のようなものがあつたのだろう（と今になって思っている）。

### 異例の「処分しない」決定

さて、その学生大会の結果をもって、学部当局との話し合いが始まった。小野君の処分に関しては、割と簡単に「処分をしない」ということが決まった。大学、というよりは文学部の先生方に、処分を強行しようという気分のないことは、私たちにもわかった。問題は告示九号のもとであえてストライキを決議したことがどういうことになるか、予想のつかない時代であった。しかし最後には、「友情の発露である」とい

うことで、なんのお咎めもなしになった。「告示九号体制」の下にあった当時の京大では、まさに異例のできごとであった。

ただ、後年、あらためて「告示九号」の全文を読む機会があった。学生処分の「根拠」とされ、当時の学生たちにとっては稀代の、「悪法」のように思えたこの文章には、前半に、「京都大学では、レッドパージは行わない」むねが明記されていたのである。それが実際の運用にあたっては、発表とほとんど同時に、前半部分は忘れ去られ、後半だけが独り歩きして、学生処分の「根拠」となったのだった。

### メーデー前夜祭で寸劇上演、劇作家山崎正和の誕生

さて、「天皇事件」以後、同学会役員としての地位を失った私は、軸足を「文学活動」に移していた。「反戦詩グループ」が、「京大文学サークル」と名を変えたのもその頃であった。その時、私を支えてくれたのが、一九五二年春に鴨沂高校を卒業し、文学部一回生として宇治分校に在籍していた山崎正和であった。

当時の京都の新制高校の幾つかには、共産党の組織があった。私の知っている所だけでも、鴨沂、山城、西京高校などである。それらの高校から、指導的な活動家が京大に進んでいた。山崎正和もその一人であった。なにしろ鴨沂高校の生徒会は、全国でただ一

つ、全学連に加盟していた高校の生徒会であり、山崎はその会長であった。同時に、鴨沂高校の文芸部は、山科の刑務所に印刷を外注して「年輪」という機関誌を季刊で発行していた。山崎はそこに抒情性あふれる詩を発表していた。

五年のメーデー前夜祭に、「京大天皇事件」を寸劇にして上演することがきまった。私の下宿で山崎と私は、額を突き合わせて台本を書いた。劇作家山崎正和の誕生であった。

そのような経験を通して、「反戦平和詩グループ」から、「文学サークル」へ発展させようということになっていく。「新日本文学」から離脱した「人民文学」の編集部から、舞鶴港に行き、新中国からの帰還者に会って、ルポルターージュを書いていこうという指示も受けた。

私が「詩」を書くことから離れて、「散文」に目を向けるようになったのは、私なりの理由があった。前にも書いたが、私はロシア語をやり、プーシキンの「オネーギン」や、ツルゲーネフの散文詩を読んでいった。衝撃的だったのは、第二次大戦中、ドイツ軍の包囲下のレニングラードにあって抵抗をつづけた女流詩人ベラ・インベルの詩「ブルコフの子午線」であった。みごとに脚韻を踏んだこの抵抗の詩の前に、私は完全に脱帽した。自分がこれまで書いていたものが、とても「詩」とは言えないもののように思えたのである。

(15面下段につづく)

## 新宮津火力発電所反対闘争 守り抜いた丹後の海

### 漁民ら2500人がデモ



「宮津火力反対」をかかげた漁民らの抗議デモ（1967年7月31日）

1967年7月31日、かねてから関西電力新宮津火力発電所建設に反対してきた丹後地方沿岸の漁民ら2500人が宮津市役所に押し寄せ、「若狭湾を死の海にするな」と抗議デモを行った。伊根町からは大漁旗とムシロ旗をたてた230隻の漁船による海上デモで参加、「町内が空っぽになった」と言われた。すでに7月7日から3日間、宮津市役所中庭で約1000人の漁民がハンストで抗議していた。

自民党や社会党が「地元の発展になる」と計画に賛成するなかで、政党では共産党だけが反対運動の先頭に立ち住民を激励し、1968年の参議院選挙で河田賢治府委員長が見事当選（伊根町では1246票、45・3%と全国最高の得票率）、1970年の知事選では伊根町で74・6%の蜷川票を出した。蜷川知事は海面埋め立ての許可などの権限をたてに71年に「発電所建設は認めない」と関電に通告、予定地に府立海洋センターを建設した。

「京都民報」は67年8月、「宮津を第二の四日市にするな」の大判2ページの号外を発行、宮津与謝の全戸に配布、反対運動を盛り上げる役割を果たした。



1967年8月16日「京都民報」

杉本弘幸 『近代日本の都市社会政策と  
マイノリティ―歴史都市の社会史―』

京都をフィールドワークとして研究を続けられてきた著者が、これまで発表されてきた研究に大幅に加筆した一冊の書を上梓された。

1920年代の京都市・京都府の社会事業の開始から戦後の1960年までを対象とした研究である。何せ400頁にならんとする大著で、それなりの価格でもあり、著者曰く「図書館で借りて読んでもらえれば」。

終章に「総括と課題」が設定され、それぞれの章ごとの概説と「本書の意義と課題」も述べられて

おり、その章だけでも20世紀の京都という歴史都市社会研究の今とこれからの課題を窺い知るこ

とが出来る。

一般の都市社会政策、被差別部落への融和政策、内鮮融和政策の相互の関係と構造を分析、関わって労働運動や部落解放運動、在日の運動と融和団体、地域社会の支配層の動き等を絡ませながらの歴史叙述はこれまでの研究に見られない新しさであり、部落解放運動や在日の運動、労働運動のなかにも常に矛盾が存在し、その矛盾と諸政策の具体的な形成、浸透過程の分析には思

わず引き込まれるのではないだろうか。関心をお持ちの方は是非その章にも目を通して頂きたい。

章の構成は以下の通りである。

①都市社会行政機構の形成／②府県社会行政と都市社会行政の関係構造―財団法人京都共済会を事例に―／③都市社会事業施設の運営と市政・地域社会―京都市児童院を事例に―／④都市社会行政職員役制・特質・機能／⑤失業救済事業と市政・地域社会／⑥「不良住宅地区」と地域住民の変容／⑦在日朝鮮人女性の自主的救済事業と「内鮮融和」―「親日派新女性」金朴春の思想と行動―／⑧都市社会政策と「内鮮融和団体」の形成と変容／⑨都市社会政策の再編成と市政・地域社会／⑩不良住宅地区改良事業の形成と変質／⑪1940～60年代の都市社会政策と地域住民組織（思文閣出版、2015年2月、定価7200円）

## 戦前戦後の京都の諸政策を解明

織（思文閣出版、2015年2月、定価7200円）（以下次号）

（13面の続き）

私は、日本語で「詩」を書くことができるのだろうか、と思ひ悩み、「詩」を書くことをやめた。というよりは書けなくなったのだ。

「詩」を書くことをやめた私の前に、一人の高校生が現れた。一九五四年の一月のことである。吉田山の北側にあった私の下宿の前の道にはまだ雪が残っていた。彼女は高校生の生活をみごとく描写でいきいきと文章化していた。そのころ発行が計画されていた雑誌「学園評論」に推薦するのに、私には何のためらいもなかった。西京高校の生徒であった中村八重子さん、のちの草川八重子さんであった。

## 資料 京都における憲法運動略年表（4）

（憲法五団体発行の「府民とともにあゆむ憲法30年」より）

## 1971年

2月21日 京都市長選、船橋求己氏当選。▽5月3日 京都府の全公所に憲法懸垂幕を掲げる。▽5月3日 京都憲法会議・憲法を守る婦人の会「憲法記念府民のつどい」（勤労会館）黒田知事ら講演、映画「沖繩」。▽5月31日 府主催「第12回憲法記念府民のつどい」美濃部・黒田・蜷川知事講演（京都会館4000人）。▽8月9日 府主催「原爆映画の夕」（文化芸術会館）。▽11月2日 「憲法を守る綾部市民のつどい」蜷川知事講演（綾部市民センター）▽11月6日 京都弁護士会主催「司法の独立と民主主義を考える講演会」瀬戸内晴美氏ら講演（京都新聞ホール）。▽11月24日 憲法5団体主催「憲法公布25周年記念府民のつどい」蜷川知事・喜屋武真栄・松本清張氏講演（勤労会館2000人）。▽12月8日 第7回戦争反対婦人大集会（婦人センター100人）

## 1972年

3月12日 物価メーデー（労働者と婦人が初めて共闘、円山6000人）。▽5月2日 京都憲法会議「憲法じゅうりんを告発し国民の権利を守る京都集会（教育文化センター）。▽5月3日 京都護憲連合主催「憲法施行25周年記念講演会」勤労会館。▽5月3日 全関西学者・文化人憲法問題懇談会（東本願寺渉成園）▽5月 府が憲法飾扇子を作成し配布。▽5月 府、点字憲法を発刊し点字を読める府下の全盲人に無料配布。▽5月14日 八幡町「憲法記念住民のつどい」（八幡小学校）蜷川知事講演、桂米朝氏の落語など。▽5月15日 宇治市・城陽市等「真の沖繩返還と憲法を考える住民のつどい」（城陽市福祉センター）。▽5月16日 相楽郡7か町村「憲法25周年記念住民のつどい」（木津中学校）蜷川知事講演ほか。▽5月24日 府主催「憲法25周年記念府民のつどい」蜷川・黒田知事、前田武彦氏講演、府政映画「豆太のおうちはひっこさない」。▽7月21日～24日 「平塚らいてう展」

（京都市ギャラリー）2000人。▽8月5日～15日 府「京都空襲と原爆展」（府庁旧館正庁ほか）。▽11月2日 京都弁護士会「司法の独立に関する講演会」正木ひろし氏ら講演（京都産業会館）。▽憲法5団体主催「憲法府民のつどい」蜷川、青島幸男、市川房枝・野末陳平氏ら講演（勤労会館2000人）。▽12月8日 第8回戦争反対大集会（婦人センター150人）

## 1973年

3月16日 府教委「教育基本法25周年記念講演会」蜷川・金沢嘉市・松本清張氏講演（勤労会館2000人）。▽3月25日 3・25京都府民総決起集会、国政革新・生活擁護・蜷川民主府政と革新統一戦線の発展をめざす、1419団体4万人参加（府立大グラウンド）。▽5月2日 京都憲法会議・憲法を守る婦人の会「憲法施行記念府民のつどい」末川博・市川房枝氏講演（勤労会館）。▽5月3日 全関西学者・文化人憲法問題懇談会（大覚寺）。5月15日 小選挙区制粉碎5・15京都統一行動（円山）1万8000人。▽5月19日 京都護憲連合「憲法記念講演会」飛鳥田一雄氏講演（産業会館）。▽5月22日 府主催「沖繩と京都を結ぶ憲法府民のつどい」蜷川知事・屋良沖繩県知事講演と沖繩民俗芸能（京都会館）2500人。▽8月18～19日 京都で第19回日本母親大会（3万人）。▽10月31日 府教委「教育委員会制度発足25周年記念講演会」蜷川知事・左幸子氏ら講演（勤労会館）1500人。▽10月27日～府下11会場府・市町村・地元団体共催の「憲法府民のつどい」細野武男・田畑忍・井ヶ田良治・笹野貞子・永井智雄・蜷川知事らが講演。▽11月10日 京都弁護士会「憲法と人権を考える集い」（勤労会館）1500人。▽11月22日 憲法5団体主催「長沼農民は告発する 憲法府民のつどい」蜷川知事・彦坂敏尚氏講演（勤労会館）500人。▽12月8日 第9回戦争反対婦人大集会（婦人センター）1000人。

# 会員消息



この機会に入会します

芦田丈司（福知山市）

この機会に貴会に入会したく思います。ずいぶん前に湯浅貞夫さんに岩崎革也に関して、また丹波地方史についていろいろと教えて頂いたことがあります。そのようなことから当時から貴会と『燎原』の存在は知っており、幾つか読ませて頂いたことがあります。永年続けてこられるのは大変な努力があったからだろうと敬服します。よろしくお願ひします。

再び勉強を開始しました

西川生子（京田辺市）

暫く社会的な活動から距離を置いてい

ましたが、高齢者大学のお手伝い等にも関わりながら再び勉強を開始しました。よろしくお願ひします。

思い出もふくめて

今西 一（山科区）

京都学生歴史科学研究会創立時のニュース等の資料が出てきました。思い出も含めて書かせて頂きます。

今西さんには1月下旬に開く例会で「京大天皇事件から荒神橋事件」について語っていただきます。（事務局）

入会 和田明（宇治市）清水鉄郎（西京区）西川生子（京田辺市）芦田丈司（福知山市）宇佐美雅子（山科区）退会 加藤豊（高槻市）

## 京都の民主運動史を語る会 12月例会

とき 12月5日（土）午後2時～4時30分

ところ 京都市職員会館かものがわ 第1会議室  
河原町竹屋町東入、石長旅館の奥

テーマ 細井友晋さんと京都の平和運動

語る人 高橋 伸一さん  
（佛教大学社会学部教授）



今年度総会の宮城泰年氏の記念講演でもふれられ、京都の平和運動に大きな足跡を遺された細井友晋さん（立本寺管長）と京都宗教者平和協議会の活動について、細井友晋さんの下で学生時代から平和運動に参加され、『そのねがい わが心に生きて』（細井友晋先生追悼集・1991年）を編集・執筆された佛教大学の高橋伸一さんに語って頂きます。

1947年福岡県筑豊生まれ。社会人経験を経て1981年佛教大大学院博士課程修了、2011年から社会学部教授。94年にはホーチミン総合大学留学。

例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料。会員外の方は資料代300円。

### 訃報

岡本 康さん 9月24日死去。87歳。治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟京都府本部会長。元京都府民医連事務局長、丹波高原荘理事長など。2011年9月の本会例会で講演した。また同年10月23日には清水寺で治安維持法犠牲者慰霊祭を実行委員長として開催した。

### 情報

#### スクラップ



#### 安破棄実行委が結成50周年

安破棄京都実行委員会が結成50周年を迎え10月3日、京都平安ホテルで記念講演とレセプションを行った。各界から75人が参加、河口代表委員のあいさつのもと共産党沖繩県議団長の渡久地修氏が記念講演、オール沖縄での選挙戦勝利が感動的に報告された。

#### 寿岳文章邸保存へ研究会

このほど故寿岳文章氏一家の功績を研究するグループが向日市民を中心に生まれ、邸宅「向日庵」の保存や文化財指定をめざす運動を始めた。文章氏と交流のあった河井寛次郎やバーナード・リーチら多くの文化人が集う場でもあった貴重な文化遺産。阪急西向日駅近くの住宅街にある。

#### 健し案内

▼トランクの中の日本 戦争、平和、そして仏教 戦後70年特別展の第2弾。米の従軍カメラマン、ジョー・オダネル氏が撮った終戦直後の広島・長崎などの写真パネル展。1月31日まで京都佛立ミュージアム（上京区御前通今出川下ル）。無料。  
▼浜矩子出版記念講演会『みんなで行こうアホノミクスの向こう側』平和の経済

学を目指して』（かものがわ出版）の出版を記念して11月28日（土）午後6時30分から京都アスニーで。会費1000円（先着400人）。☎415-7902（かものがわサロン）

▼映画『エイジアンブルー 浮島丸サコン』（堀川弘通監督、1995年、111分）上映&トークショー 12月6日（日）午後2時、立命館大学朱雀キャンパスホール、1000円（前売り）。トークショーに主演の藤本喜久子さん、立命館大学国際関係学部教授の文京洙さんが登場。  
▼夏梅誠一著『棄民』のあしあと』出版を祝う会 12月8日（火）午後4時、ルビノ堀川。祝宴は6時から。☎0774-444-4056（永野）

▼丸木位里没後20年丸木位里・俊・スマ・ひさ子展 12月8日（火）～13日（日）ギャラリーヒルゲート（寺町三条上ル）  
▼河上肇没後70周年記念座談会「河上肇の人と思想」 1月30日（土）午後1時半～5時、京都大学楽友会館2階講演室。池上惇・森岡孝二・西牟田祐二・阿知羅隆雄。参加無料。河上肇記念会主催。

### 編集後記



▼今号も苦勞した。「原稿が足りないならページを減らしたら」という意見もいただいたが、やはり可能な限り16ページを維持していきたい。不足分は自ら執筆したり、急遽メールで頼んだりしてこの号も出来上がった。

▼戦後70年、本会結成35周年の年も今号で終わり、次号は新年号。2016年の歴史を転換する年にするために自らの戦後史を綴り、貴重な体験を後世に伝えていくことが重要になっている。積極的な投稿を期待したい。（湯浅）